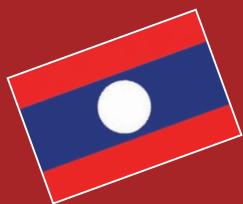


# ラオスと宇治、 それぞれの「地域」に 関わることから、 利他の心を知る。



グローバルと「利他」①

立命館宇治高等学校 I・M コース 座談会



立命館宇治高等学校のIMコースでは、1年間の留学（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド）や、一部の科目を除いて英語で行う「イマージョン授業」、そして課題解決型学習の3つの柱で、教育プログラムを提供しています。入学時からGLS（Global Leadership Studies）という科目では、自国を見つめる、各界のフロントランナーと出会うなどの経験を積み、3年生では本格的にグローバル社会や地域の課題に対し、解決策を提案し実現していくグローバル課題研究に実践的取り組みます。

ここでは①Wakkaプロジェクト（タイ・ラオスの子どもたちの就学支援）、②ラオス教育支援プロジェクト、③宇治活性化プロジェクトの3つのグループに分かれて活動します。活動は数年にわたって先輩から引き継がれ、年々新たな課題に向き合いながら、生徒たちの学びも深化しています。同校のSGH（スーパーグローバルハイスクール）発表会を終えた生徒のみなさんに、グローバルな視点で学び、行動すること、利他の心のつながりについてうかがいました。

**金井** まずは自己紹介と今日のSGH発表会で印象に残っていることを教えてください。

**坂下** 私は宇治活性化プロジェクトについて、今年取り組んだ「キャンドルナイト」などをポスターにまとめて発表しました。学外の方がたくさん来られていましたが、自信をもって話すことができてよかったです。

**松元** 発表の司会を担当し、立命館宇治について英語で紹介しました。最初はドキドキして、緊張して速くしゃべり過ぎたかなと思っていましたが、周りの人から「ちょうどよかったよ」と言ってもらえてほっとしま

した。

**酒井** 「らおにん」という取り組みに関して、英語でポスターセッションを行いました。APUの方、他校の先生や企業の方、保護者の方に聞いてもらい、質問もありましたがなんとか乗り切れました。認められたような気がして嬉しかったです。

**丸野** 今後行く予定のカンボジア研修に関わって、現地の事業家の方とオンラインで会話する授業を見てもありました。2年生はみんな1年間の留学を経験して帰国しています。一人ひとり留学で違う経験をしていますが、3年生になり、一緒にアクションを起こすことにワクワク

感がありました。

**細見** 丸野さんと同じ授業で、私たちはカンボジアの事業家の方に企業名の由来などを質問しました。事前に質問を考えていたのですが、実際の場になるとあまり聞き出せず、いざやってみると難しいものだなと思いました。

**一人ひとりが外国で出会った「異文化」。**

**金井** ありがとうございます。では、今回の特集であるグローバルの話題には海外とのさまざまなプログラムがありますが、それらを通じてどの



座談会参加者：立命館宇治高校IMコース  
(向かって右から)坂下夏帆さん(3年)、松元裕希さん(3年)、  
酒井太一さん(3年)、丸野泉紀さん(2年)、細見伊吹さん(2年)

聞き手 | 金井文宏 (RITA編集人)

コーディネーター |

浮田恭子 (立命館宇治高校SGH運営指導委員)

武部恵子 (立命館宇治中・高 主幹 国際教育担当)



ラオス、日本、タイ、フランスの4ヶ国の文化をグループ学習する小学生たち。

ような異文化経験をし、どう受けとめたかを聞かせてください。

**坂下** 私はオーストラリアに行きましたが、慣れるのにずいぶん時間がかかりました。ホストは中国系のファミリーで、学校も国際的でアジア系の留学生もたくさんいました。ここで「言語の壁」、それも英語ではなく、中国語やハンガルの壁にぶつかりました。彼らは母国語で会話するので何を言っているのかわからず、ずっと気になっていました。帰国直前になって「自分だけがわからない会話は嫌だ」と伝えたところ、「そう思っているんじゃないかと思っていた」と言われて。もっと早く思いを伝えるべきだったと少し後悔しましたが、最後は仲良くなれてよかったです。

また、ホストマザーは私の至らない点をズバツと指摘して、何度も注意するのは。よかれと思ってることだとはわかるのですが、日本ではあまり経験したことがなく、こうした人間関係における「間の取り方」にも戸惑いました。

**松元** 私はラオス教育支援プロジェクトでラオスに1週間滞在しました。当初、ラオスの子どもたちは海外について学ぶ機会が少ないことや、積極性・協調性に課題があるのではないかと考え、これらを改善する授

業を小学校で行う計画を立てました。自分で絵を描き、そこに英語とラオス語を入れた手作りの教材も用意しました。でも、ラオスには読み書きが満足にできない子どもや、そもそも「書き言葉」を持たない少数民族の子どももいるのです。次回はそういうことも考えた教材づくりを企画したいと思いました。

私には「発展途上国の人は貧しくてかわいそう」という固定観念から、豊かな日本に生まれた私たちが助けるのは当たり前という感覚がありました。でも、村のお祭りに行ったら、古いけど観覧車が回っていたり、夜店があったり、みんなとても楽しんでる。『実は彼らの方が人生を楽しんでいるのでは』と思うこともありました。織物を織っている女性を訪ねた時には、「売りたい」という感じがなく、「働いてお金をもらうことが幸せ」という考えがすべてではないと気づきました。収入を増やし、経済成長を促すことが本当に現地の人たちの幸せにつながるのだろうか？ 本場に必要なのは支援とは何なのか？ 支援を「押し付ける」のではなく、正しいあり方を考えないといけないと感じました。

**酒井** 僕はカナダに1年間留学しましたが、文化の違いを一番感じたの

は学校のアクティブラーニングです。自分で資料を読み込み、意見をまとめて発表し、ディスカッションをする生徒主体の授業で、先生から教科書で教わり、テストされるといふ今までの日本での学びとはまったく違いました。カナダでは人の話を聞いて、そういう考えがあったのかと発見する機会が多く、他の人の違う価値観がどんどん自分の中に入っていくという実感がありません。

**丸野** 私もうオスに行ったのですが、発展途上国に行くのは生まれて初めてでした。SDGsの授業で学んでいたのですが、現地では松元先輩と違い、織物を「買って！買って！」と何度も言われました。お祭りに抱いたイメージも先輩とはちょっと違って、伝統的なお祭りなのに突然観覧車が出てきたりして、ちょっと奇妙に感じました。英語の授業では子どもたちに「英語が使えると世界が広がる」ということを感じてもらいたいと思っていました。

**細見** 私は「Wakkaプロジェクト」に参加し、支援によって学校に通えるようになったタイの子どもの家を訪ねました。その子は学校へ行くようになって、とても明るい性格に変わったそうです。その後、NGOの人と一緒にまだ支援を受けられ

ていない子どもの家にも行ったのですが、水道もガスもない家庭を実際に見たのは初めてでした。お父さんは出稼ぎ、お母さんはおらず、NGOの人が「次はこの子を支援する」と伝えると、おばあちゃんは「この子が学校に行けるようになる」と言って泣いていました。実際に支援が届き、それを人々がどう感じているのかを見て、やはり素敵なことだなと感じました。もちろん、本当に必要とされる支援を考えることもとても重要だと思います。

1年生の時には、GCP（グローバルチャレンジプログラム）で日・中・韓の3ヶ国の生徒が民主主義について議論するという場に出させてもらいました。それぞれの国の生徒がまず20世紀の年表を書いて話し合いをするのですが、起こった事実はいずれも受け取り方がまったく違うんです。私たち日本の高校生は現代史の勉強があまりできていないだけでなく、それをどう捉えるのかを話し合ったこともありません。一方で中国や韓国の生徒は自分たちの見解をしっかりと述べていました。とても厳しい体験でしたが、最後に「協力することが大事だ」と言ってくれて、とてもいい経験をできたなと思います。



世界地図で4ヶ国の位置を示し、各国の特徴をプレゼンする高校生たち。



IMコースのネイティブ教員による授業。

## プロジェクトを通して 見えてきたもの。

**金井** では、最後にみなさんがプロジェクトから学んだことを、「利他」という視点を入れて語ってもらえませんか。

**細見** Wakkaprojectのための募金を留学先のカナダでもやった時は、バイク・プロジェクト（自分で焼いたパンやクッキーを買ってもらう）だけでなく、輪投げをしてもらい、その景品に折り鶴を渡すといった工夫をしてみました。学校の先生が寄付をしてくださることもありました。実際に動いてみると、多

くの人が協力してくれてこそ実現できる取り組みなのだと思えました。

Wakkで集めた募金は公益財団法人際センターの「ダルニー奨学金」という、支援する子どもがはっきりしているところに届けるのですが、実際にタイに行ってお金を受け取って学校へ通っている子たちと出会えて、「やってよかったな」と実感できました。最初はIMの先輩から誘われたのがきっかけだったので、このような体験ができて、将来は世の中を良くすることに関わりたいと思うようになり国連で働けたらいいなと思っています。

**丸野** 「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」に参加した時に、ラオスでの経験が役に立ちました。支援とビジネスを掛け合わせるのには難しく、本当に必要な支援は何か、考える必要があります。ニーズをしっかりと把握することを考えるにはいいかもしれません。GLSではいろんな人と触れ合い、いろんなことを学びました。次はアクションを起こす番です。将来の夢で今の自分の気持ちに近いのは、細見さんと同じく国連で働くことでしょうか。

**坂下** 私は宇治の町おこしに参加しました。宇治は観光地で多くの観光

客が訪れますが、夜には神社も食べもの屋さんも閉まってしまいます。そこで、観光客が夜も宇治に留まれるようにしたいと、今年度は12月に「キャンドルナイト」のイベントをしました。

宇治には二つの世界遺産があります。平等院と宇治上神社です。この二つに挟まれた宇治川に「塔の島」という島があり、そこに300本のキャンドルを灯そうと企画しました。自分たちで許可を取ったり、資金集めのために広告を集めたり。当日はたくさん観光客の人が来てくれて、「楽しかった」「めっちゃきれい！」と言ってくれて、インスタにも載せてくれて嬉しかったです。この日のために1年間活動し、宇治の人たちとたくさん関わり、現実をリアルに学ぶことができました。市役所の方や大人たちがアドバイスをくれて、そういうコミュニケーションの機会を持っていただくのが私たちの収穫です。将来は観光学を勉強したいと思っています。

**松元** ラオス教育支援プロジェクトでは、8月・10月・12月の3回、9人ずつでラオスを訪問しました。8月にはアメリカ・イギリス・イタリア・ラオスの4つの国にまつわるものをカードに描いて、どこの国かを



宇治平等院前の宇治川の中洲に点灯されたキャンドルナイト。

考えてもらうことにしました。子どもたちは興味を持ってくれたのですが、本当にこの4つの国でいいのかという課題が残ったのです。イタリアのことは誰も知らなかったし、米軍の不発弾が多く残っているという

現実があったからです。

そこで、10月にはラオス・日本・タイ・フランスの4ヶ国に変更しました。例えば「ラオバーガー」というフランスパンを使ったハンバーガーがあります。フランスの植民地だった時代の名残ですが、ラオスが植民地だったことを知らない子どももいました。日本とタイはラオスと

同じ仏教国ということで選びました。日本の金閣寺のように、タイにも金ぴかの寺院があり、お寺を金で装飾する共通点があるんです。国境があっても共通点やつながりがあることを理解してもらいたくて。今後は気候やマナーを取り上げて、この授業をさらに発展させたいですね。こうした経験を通してわかったこ

とは、ラオスの子どもたちは海外にとても興味があるということ。インターネットも教科書もないので海外のことを知る機会がありません。先生はおっしゃっていましたが、プロジェクトの今後を考えると、文字の書けない子どもへの対応や、私たちが自身もラオス語を学ぶなど、思いつくことはたくさんあります。

日本人はお金に依存し過ぎではないでしょうか。ラオスではお金でなく、自分たち仲間で娯楽をみつけて楽しんでいました。将来はユニセフやNPO、ボランティア団体で働いたり教育にも関わりたいと思っています。

**酒井** 僕はラオスの農家の商品を日本で販売するチャンスをつくり、同時にラオスの就学資金援助をするというプロジェクトに取り組みました。2年前の先輩が始めて、活動は2年間行ってきました。まずはコーヒーなどラオスの隠れた名産を発掘します。最近では花から色素を抽出する「バタフライピー」というハーブティーが人気で、カルピスと混ぜて売りました。また、カトウ族の農家の商品を買って学園祭と地域のお祭りで販売しました。Wakkaプロジェクトと合わせて18万円ほどの収益があり、「ダルニー奨学金」に寄付できました。

コーヒー豆は宇治橋商店街の「鄙庵」というコーヒーショップで販売してもらえようになりました。鄙庵さんは収益の8割を立命館宇治に寄付してくださっています。今後は実際にラオスのコーヒーを飲んでもらうことにも挑戦したい。同時にラオスの農村のことを知ってもらうための広報も行っていきたいですね。

自分たちが一方的に何かをするのではなく、ラオスの人にとって何が幸せなのかをちゃんと考えて活動しなければいけません。例えば、ラオスの人が手織りのものを作っている時の誇りや、ラオスの人はお金より家族と過ごす時間を大切にしているという価値観。そうしてラオスの人にとつての幸せとは何かを考えていきたいです。卒業後は立命館アジア太平洋大学に進学して、大学在学中に大型クルーズ船で3ヶ月ほど働きたいと思っています。



「バタフライピー」をカルピスと混ぜて販売する。



ラオスの農産品の販売に参加した高校生たち。



ラオス産のコーヒー豆を使う。